

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：37116

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K10760

研究課題名（和文）ブレンド型学習による看護学の「より深い学習」のICEモデルアプローチ

研究課題名（英文）ICE model approach of "deep learning" of nursing science by blend type learning

研究代表者

佐藤 亜紀 (Sato, Aki)

産業医科大学・産業保健学部・講師

研究者番号：80435130

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：2020年の新型コロナウイルスの感染拡大状況下での看護学における「オンライン演習」と、「オンライン実習」の構築と実践評価を行った。オンライン演習については、「ケアを思考する」ことを学習目標にした。結果、オンラインにより学生全体で同じ視点を持つことが可能なため、教員が意図する学習ポイントに向きやすく、ディスカッションも活発なものとなった。本報告は、第3回日本看護シミュレーション学会学術集会において優秀演題賞に選出された。次に、オンライン実習ではコンテンツの見直しと修正を行った。感染状況が月単位で変化する中、臨地実習とオンライン実習のブレンド型の看護実習の構築について研修会等で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回、感染状況により、オンラインにせざるを得ない状況下で、技術から思考へと学習目標を転換することにより、患者の状態に合わせたケアを思考するというトレーニングができ、それは対面で実施してきたこれまでの技術教育では発見できなかったことである。実習においても、今回オンラインと組み合わせることによって、実習での現象をより深く考察することができ、看護学として深い学びを追求することができることがわかった。これは、今後の看護学教育の実践方法の根本的見直しの必要性を示唆するものである。しかし、看護学における学習成果の測定は難しく、形成的評価が課題である

研究成果の概要（英文）：We constructed and evaluated the "online exercises" and "online training" in nursing practice under the spread of the new coronavirus in 2020. As a result, since it is possible for all students to have the same perspective online, it is easier for teachers to focus on the learning points intended, and discussions have become more lively. This report was selected for the Outstanding Presentation Award at the 3rd Annual Meeting of the Japanese Society of Nursing Simulation Learning.

Next, in the online training, the content was reviewed and revised. As the infection situation changed on a monthly basis, we reported on the construction of a blended nursing practice of clinical practice and online practice at workshops.

研究分野：看護学教育

キーワード：ブレンド型学習 学習の効果 オンライン演習 オンライン実習 より深い学習

1. 研究開始当初の背景

近年、大学教育では SNS や LMS の発展に伴い、対面授業、総合的学習経験のブレンド型授業が広がりつつあるとともに、これらの教育の質を向上するための研究報告がなされるようになってきた。また、e-ラーニング上には学習データが増大し、これらのデータを解析し、高等教育での施策に根拠を持たせる動きが盛んになり、教育において生成されるデータの増加とそれらにもとづく新しいアプローチの必要性に迫られ、ラーニング・アナリティクス(学習分析)が登場した。学習分析に用いる学習データとは、学習プロセスでデータとして分析しうる、学習ログや思考プロセスメモなどすべての顕在的・潜在的データを指す。

看護学教育では近年、ブレンド型学習だけでなく、シミュレーション演習や看護の OSCE が試みられているが、いずれも試験の成績と e-ラーニングなどオンデマンド教育のログ評価と学生の主観的評価のどちらかであり、総合的に、多角的、縦断的にその思考のプロセスを分析された報告は少ない。それらを解析することで、学生の学習活動が可視化でき、知識と思考と配慮を統合して実践する看護技術における、学生の複雑な学習プロセスを明確化できると考えた。

2019年1月より国内において、新型コロナウイルスの感染拡大を認め、それに伴い大学教育は突然の、教育方法の転換が求められ、授業はオンライン化した。ヒューマンサービスを基盤とする看護学教育においては、技術演習や看護学実習の方法について検討することはまさに喫緊の課題となった。よって、研究計画を立てた当初の e-ラーニングと対面授業のブレンド型授業の効果測定ではなく、対面授業・演習・実習とオンライン、さらには e-ラーニングと組み合わせた方法論を、その都度変化する社会情勢に合わせて選択しなければならない状況が生じた。

2. 研究の目的

当初の研究目的は看護学教育におけるオンライン学習と対面型学習を取り込んだブレンド型学習の学習効果を、学習分析(ラーニング・アナリティクス)によって検証する。その結果から、看護学教育における「より深い学習」を ICE アプローチの視点で考察し、最適な学習システムのモデル構築を目指すものであった。しかし、前述したように新型コロナウイルスの感染拡大により、時の感染状況により授業方法が異なり、計画的な実施は困難であった。そのような中、対面での実施が当然とされている技術演習、臨床実習についてオンラインでの実施を振り返り、その効果を考察することを目的とした。

3. 研究の方法

実践報告である。

(1) オンライン演習について

学生が急性期から回復期に向かう術後患者を事例に、「患者の状態に合わせた看護援助について思考する」ことを目的にオンラインでのシミュレーション演習を実施し、オンラインという新たな演習方法について考察する。

(2) オンライン実習

本学科の成人看護学急性期の遠隔実習をどのように構築し、展開したのかといった実践について報告する。尚、実習が継続中のため、実践のみの報告である。

4. 研究成果

(1) オンライン演習のメリットの明確化

対象となる単元は、4年生大学2年生の成人看護学(急性期)の科目での実践である。脳神経疾患のある患者の看護についてオンラインでの講義2時限、演習1時限で構成し、学習目標は「脳神経障害で生命危機を脱した患者(あるいは回復期にある患者の)の日常生活の拡大に向けた具体的な看護を提案できる」とした。

学生は e-ラーニングで回復期へ移行した患者の状態観察場面の動画を視聴し、次に、グループに分かれ予め立案していた看護計画の修正と看護師への援助の提案内容についてディスカッションを行った。その後、代表学生が修正した看護計画のケアプランを、ZOOM 越しで看護師役の教員に提案し、看護師は学生の指示通りに援助を実施した。最後に、今の状態に合った看護だったのかを検討するデブリーフィングを行った。

結果として、オンライン演習では、学生の視点や視界が固定されるため教員の教材作成の意図が反映されやすく、看護師の行為に全員で注目できるため患者の反応も捉えやすかった。学生は患者の反応から患者の状態が日々回復し、その状態に合わせてプランを具体的に修正することの必要性、また文字化されない配慮の必要性にも気づき、本演習の形態で思考することができた。

以上の結果より、オンラインの演習の利点として、教員の意図により焦点化できるため、介入や患者の反応を、参加者全員でより深く掘り下げて思考できる。今回は実践報告である

が、今後、形成的評価につなげていきたい。

(3) オンライン実習

急性期の看護では、瞬時の臨床判断のもと術直後のモニタリングなどの看護援助が短時間で展開される。その時間の中で学生は看護師のその場の臨床判断に触れるが、見逃すことも多い。また、先に述べたように臨地実習は場面展開が早く、次々に学修機会があるため、学生は多くの場面に遭遇するが、教員、指導者とともに振り返りを行う時間が十分とは言えないのが現状である。

今回の遠隔実習では、学生が立案した計画に沿って看護師役となった教員が援助を実施した場面では、環境整備や物品に不足があったり、逆に患者にとっては過剰な準備となったり、模擬患者に対し効果的でない援助を実施することも生じた。臨地実習では、患者に援助を行う前に当然ではあるが誤りが起きないように、学生が気づけるように指導を行う。しかし、遠隔実習では目の前で生じた、ある意味では「失敗したその場面」をグループで振り返ることにより、学生はよりよいケアを探求するという学び方が可能であった。つまり遠隔実習では、安全が保障され安心して間違えることができる状況下で、学生は間接的ではあるが経験した援助について学生同士でのディスカッションを通して、看護の省察や自己省察ができることが分かった。

また、「実習」という授業形態を考え、看護師の実践を見せる場面はあえて収録せずリアルタイムで、かつ臨場感を損なわないよう臨地でのスピードのまま展開した。その結果、学生は場面に集中して参加しており、遠隔実習では丁寧に振り返ることができるという利点を改めて実感することになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 永松有紀 白石祈枝 佐藤亜紀 | 4. 巻 26 |
| 2. 論文標題 新型コロナウイルス禍における成人看護学急性期の遠隔実習 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌 | 6. 最初と最後の頁 101 106 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐藤亜紀 白石祈枝 永松有紀 |
| 2. 発表標題 臨床実習前のOSCE（客観的能力試験）実施後の学生の学びと課題 |
| 3. 学会等名 第32回日本看護福祉学 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐藤亜紀 白石祈枝 永松有紀 |
| 2. 発表標題 患者の状態に合わせた看護援助を思考することを目標にしたオンライン演習の実践報告 |
| 3. 学会等名 第3回日本看護シミュレーションラーニング学会学術集会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 永松 有紀 (Nagamatu Yuki) (20389472) | 産業医科大学・産業保健学部・准教授 (37116) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 白石 祈枝 (Siraisi Tosie) (90847576) | 産業医科大学・産業保健学部・助教 (37116) | |
| 研究分担者 | 浅田 義和 (Asada Yoshikazu) (10582588) | 自治医科大学・医学部・准教授 (32202) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |